発表 No.実7　　**実践発表**

一斉授業と日本語支援:アイデア共有の可能性を探る
―NHK for School「ツールボックス」制作を通して見えてきたもの―

草谷緑（NHK エデュケーショナル）

１．実践の場・目標

NHK for School[1)] は、NHK が制作する学校教育番組やクリップ動画（以下「動画」と総称）あわせて約１万本を配信する教育コンテンツのポータルサイトである。その中に 2022 年、外国につながる子どもたちとの学びに動画を活用することを提案する特集サイト「多文化・多言語な子どもたちとどう学ぶ？～学習支援のツールボックス～」（以下「ツルボ」）[2)] が公開された。発表者は学校教育番組制作者として、子どもの日本語教育研究会関係者をはじめさまざまな専門家や実践者の協力を得ながらこのサイトの立ち上げ・運営に関わってきた。

「ツルボ」は、動画活用という切り口を通して、学習支援の創意工夫やアイデアを集め発信することをねらいとしている。また、母体となる NHK for School の利用者の多くが学級担任や教科担任であることから、日本語支援の場[3)] にとどまらず、一斉授業をはじめ多様な教育現場で役立つ情報発信を目指している。

２．過程

2.1．動画活用の利点の発信

NHK for School の動画は、日本語を母語とする子どもを念頭に制作されている。しかし「ツルボ」制作の過程で分かったのは、日本語が母語ではない子どもにこそ動画が有効なことだった。まず、“視覚化”されるのでイメージをつかみやすい。そして、“多様な日本語の音声”を聞くことができる。さらに、“字幕を自動翻訳する”“リンクを共有する”などウェブコンテンツならではの利点もある。これらの利点の中には、必ずしも番組制作者が意図したことではなく、実践者が必要に迫られて見いだしたものもあった。そこで「ツルボ」では、動画活用のさまざまな可能性について発信するために、専門家や実践者に「活用案・実践例」の執筆を依頼し掲載してきた。

2.2．日本語支援でのアイデアを一斉授業に「逆輸入」

当初「ツルボ」に掲載される「活用案・実践例」は、日本語支援の場でのものがほとんどだった。しかし、そこに書かれたアイデアの中には、“イラストや図を使う”“視聴前に語彙を整理する”など、日本語教育の知識を持たない教員にも取り組めそうなものが含まれていた。NHK for School 利用者の大多数は学級担任や教科担任である。そして子どもが大半の時間を過ごすのは一斉授業の教室である。そこで「ツルボ」では、掲載している「活用案・実践例」が一斉授業をはじめさまざまな場面に応用可能であることを示すために、「感想コメント・応用アイデア」という欄を設けた。これは、各「活用案・実践例」に対して、学級・教科担任、地域の支援者、スクールカウンセラーなど多様な立場から３名程度が「ここが参考になった」「自分の現場ではこのように取り入れたい」などの短いコメントを寄せるものである。その執筆依頼の際に行った打ち合わせでは、「この方法いいですね」「私もやってみようかな」という声がたびたび聞かれ

た。たとえば「予習で動画を視聴させる」という高校社会科における日本語支援での実践に対し、中学校社会科の教員が「授業で見せられるよりも主体的な方法だ。しかもプリントなどの宿題より取り組みやすい」と語った。日本語が母語の子どもたちを念頭に作られた動画が、日本語支援の場で試行錯誤しながら活用され、その成果が一斉授業の改善にも役立つという展開が「まるで逆輸入のようだ」というやり取りも交わされた。

2.3. 学級担任・教科担任ならではのアイデアの発掘

一方で、一斉授業における「活用案・実践例」の掲載を増やすことも試みている。日本語教育の知識を持たない教員による実践を読むことで、NHK for School を訪れる多くの教員が「自分にもできそうだ」と受け止めることを期待している。

2024 年 2 月に新規掲載の 3 ケースは、放送教育や ICT 教育、国際理解教育を学ぶ教員による一斉授業の実践で、“意図的に一斉視聴と個人視聴を組み合わせる”“デジタル端末のさまざまな機能を活用する”など日本語教育とは違う専門性からのアプローチが見られる。これらの実践に「感想コメント・応用アイデア」を寄せた日本語支援者は「その発想はなかった。明日にもやってみよう」と語った。上述の「逆輸入」のさらに逆方向である。

加えて、これら一斉授業での「活用案・実践例」に特徴的なのは、集団の中で子どもの成長を促すという視点である。日本語を母語とする子どもたちを交えたグループワークなど、交流を仕掛け、多様性を肯定的に捉える集団作りを目指していることが読み取られる。また、授業だけでなく学校行事や日常生活も含めて子どもたちの学ぶ環境を調整できるのも、学級担任・教科担任ならではの支援である。

３．成果と課題

外国につながる子どもは、一人の人間、ひとつの専門性では支えられない。「ツルボ」公開から１年余り、意識的に多様な専門性の交差を試みる中で、多くのアイデアが分野横断的に役に立つことを発見し、発信できたことは一定の成果であった。

一方で、日本語支援の場での実践例が質量ともに豊富であるのに対し、一斉授業での実践はまだまだ十分に発掘できていないと考えている。専門家や実践者のコミュニティが日本語支援に比べて発達していないことも困難の一因である。しかし、さまざまな教育現場で聞く話からは、支援の工夫やアイデアの多くが暗黙知の形で蓄積されていることが推測される。今後さらに実践例を集め、系統立てていくことが課題である。

同時に、HP のみで交流を起こすことに限界も感じている。多様な分野の学会や勉強会等で発信し、外国につながる子どもへの関心を喚起していく必要があると考えている。

注）

1）NHK for School　https://www.nhk.or.jp/school/

2）「多文化・多言語な子どもたちとどう学ぶ？～学習支援のツールボックス～」
https://www.nhk.or.jp/school/cld-toolbox/

3）制度的にも実践者の属性においても多様なケースが含まれるが、ここでは一斉授業との対比として、別室で行われる個別指導や少人数指導を「日本語支援」と総称する。